

子どもの本のひみつ

(題字・イラスト 陣崎草子)

2020年1月11日、神奈川県藤沢市南市民図書館にて、「連続トークイベント 子どもたちのひみつ⑦」が開催されました。トークゲストのお二人、スペイン語圏の翻訳家・宇野和美さんと、作家・池田ゆみるさんに、「図書館」を切り口に、熱く語っていただいた中から、一部をご紹介します。(まとめ 濱野京子)



宇野 和美 さん

言わせて!



池田 ゆみる さん

中学生ぐらいから翻訳する人になりたかった。本はずっと「よいもの」として身近にあって、子どもの本に助けられてきた。スペイン旅行の時に本を買い、いつかその中から訳したいと思うようになった。もともと絵本よりは物語をやりたいかった。

(なぜ、児童文学と関わるようになったか)

図書館で働いていた時に、児童文学を読む職員対象の読書会に参加した。子どもの本って素晴らしいと思った最初。その後、和光大学の児童文学創作講座を知り、児童文学という言葉に飛びついた。本当は評論をやりたいかった。

(なぜ、児童文学と関わるようになったか)

転校が多かったせいか、図書館についての思い出はあまりない。今は閉館してしまったが大阪の桜宮図書館は古い建物で古いにおいがした。もう何を借りて読んでいたかも覚えていないが、図書館は遊びに行く好きな場所だった。

(図書館の思い出、好きな図書館)

子どものころは学校図書館を利用した。好きな図書館はこの南市民図書館。駅そばに引っ越してきてますます便利。羨ましいのは大和市のシリウス。豊富な蔵書を眺めていると時間があっという間に過ぎてしまう。

(図書館の思い出、好きな図書館)

考えるのを誘う本が好き。『雨あがりのメデジン』もそんな一冊。10歳の子が学校に行かず、父親は働かずに飲んだくれていて、日本にいたら、別の世界の話のように思えるが、まさに現代のこと。

(図書館にまつわる物語を訳そうと思ったのは)

図書館のことを書こうと思ったのではなく、女の子と母親が坂を登っていく姿がふっと浮かんだ。二人は自立支援センターに行くのだと思った。向かいには図書館がある。本でこの子が元気になっていくという物語を書こうと思った。

(図書館にまつわる物語を書こうと思ったのは)

図書館愛にあふれた物語。郷土資料とか、レファレンスという言葉が出てくると「図書館が好き」という思いがあふれている。主人公に寄り添っていく感じがよかった。

(『坂の上の図書館』について)

ラストシーンは、図書カードを作るのかどうかはわからない形で終わっているが希望を感じた。ぜったい作ってね、と思いたくなるようなラストだった。

(『雨あがりのメデジン』について)

国(公共)は私たちの基本的人権を受け取った上で、お金を出すものなのに、スポンサーのように自分の言うことを聞かなかつたらやらないよ、みたいなのはおかしい。公のお金は私たちの税金でもある。

(図書館の自由、表現の自由について。あいちトリエンナーレの表現の不自由展のことなどを念頭に)

少女像は図書資料の観点からは、禁じられるものではない。美術館も「美術館の自由の宣言」などがあってもいいのでは? 図書館も、一度責任をもって入れた資料はすべて公開すべき。

(図書館の自由、表現の自由について。あいちトリエンナーレの表現の不自由展のことなどを念頭に)

宇野 和美 (うの かずみ)

東京外国語大学卒業後、出版社勤務を経て、スペイン語の翻訳に携わる。「ベラスケスの十字の謎」(徳間書店)、「マルコとパパ」(偕成社)、「おにいちゃんとぼく」(光村教育図書)、「民主主義は誰のもの」(あかね書房)など、児童書を中心に40点以上の訳書がある。

『雨あがりのメデジン』

(アルフレッド・ゴメス＝セルダ・作 鴨下潤・絵 鈴木出版)

舞台は南米コロンビアのメデジン。町をとりかこむ丘の斜面の貧困地区バリオで生まれ育った10歳のカミーロは、のんだくれの父親のために酒を手に入れられなければならない日々。最近できたスペイン公園図書館でも、親友のアンドレスがとめるのも聞かず、本を盗んで売って、お酒を得ようとするが……。図書館員のマールと出会い、本と出会い、すこしだけ変わっていく予感が、コロンビアの雨や泥、社会問題を背景にじんわりと描かれている。中学年から。



『フォスターさんの新聞配達』

(エリアセル・カンシーノ・作 猫野べすか・絵 偕成社)

1960年代のスペイン南部の海辺の町に住む少年ペリーコは、母を病気で亡くし、どなりつけるばかりの父にも失望し、盗みをはたらいてしまう。学校へも行かず、うそを重ね、さらには村のにせ札事件に巻き込まれていくペリーコが、孤独の中で出会ったのが、村で変人扱いされているイギリス人のフォスターさん。郵便局にたまった新聞を届ける手伝いをするうちに、フォスターさんを通して、写真芸術や本に触れ、スペインの歴史を知っていく。あやうい時代の少年の心を、個性的な人々とのつながりで描く物語。



(作家・作品案内 奥山 恵)

池田 ゆみる (いけだ ゆみる)

神奈川県出身。「空が燃えた日」が『鬼ヶ島通信』47号で入選。デビュー作『坂の上の図書館』(さ・え・ら書房)が埼玉県推薦図書、ならびに茨城県推薦図書などに選ばれる。日本児童文学者協会、JBBY会員。児童文学同人誌「ももたろう」同人。

『坂の上の図書館』

(羽尻利門・絵 さ・え・ら書房)

5年生の春菜が暮らすことになった「あけぼの住宅」は、父親がなく生活に困っている母子の自立支援センター。それまでの不安定な暮らしゆえに、勉強も遅れ、言葉もなかなか出てこない春菜だが、あけぼの住宅の隣にある市民図書館へ通うようになり、本の楽しみを知る。図書館の司書さんや、新しい学校で知り合ったたのしい同級生真琴と過ごすうちに、少しずつ生かせる自信をとりもどしていく春菜の心情が、図書館や本を軸に、やわらかく伝わる。



『川のむこうの図書館』

(羽尻利門・絵 さ・え・ら書房)

『坂の上の図書館』にも登場する竜司を主人公とするスピンオフ作品。父親は小さい頃に家を出て行き、以来母と二人暮らしの竜司。生活は苦しく独りで過ごすことも多い。しかし、卒業記念の自由研究で、気が強い美紀、おとなしいが粘り強い悠人といっしょの班になり、図書館で地域の遺跡を調べることに。かつて地域センターの市民図書館から雑誌を盗んでしまったことのある竜司は、行きたくなかったのだが……。家族の中から、友だちや地域とのつながりへと広がっていくきっかけとして、図書館が豊かに描かれている。



ママが行ってみたいよー!

江ノ電に乗って藤沢へ

「子どもの本のひみつ」第七回会場は、藤沢市南市民図書館です。遠回りですが、横浜・鎌倉経由で目的地まで行くことにしました。横浜駅からJR横須賀線で約30分。鎌倉には、大正時代から多くの鎌倉文士が住んでいました。レトロな江ノ電に乗り換え、由比ガ浜駅で降ります。坂を上って、鎌倉文学館を訪れました。旧前田侯爵家の別邸だった建物は瀟灑な和洋折衷。バラの季節には咲き誇る花が美しいのですが、冬は葉が目立ちます。館内には夏目漱石、川端康成、吉屋信子など、近代文学の名作を生み出した鎌倉ゆかりの作家、三〇〇人以上の名があがっています。ここでは、「魔女の宅急便」を書いた国際アンデルセン賞作家・角野榮子の、子どもに向けてのお話会なども、催されているそうです。

随筆『鎌倉日記』を上梓しているのは、小説家・詩人の三木卓。図書館から旧満州へタイムスリップする『ほろびた国の旅』は、読み継がれてほしい児童文学です。現代ファンタジーの草分け、佐藤さとるの『だれも知らない小さな国』は、横須賀の按針塚のある公園が発想の源で、近作『本朝奇談 天狗童子』は、一六世紀相模の国を舞台にした歴史ファンタジー。朽木祥の『かはたれ 散在方池の河童猫』『月白青船出』なども、歴史の重なる鎌倉の土地あつてこそその物語といえるでしょう。

鎌倉文学館から遠くに望む湘南の海は、青く光ってまぶしいほど。海岸近くを散策すると、波に戯れるサーファーや、ヨットがそこかしこに浮かんでいます。由比ガ浜と聞いて、海水浴やサザンオールスターズではなく、鎌倉時代の処刑場を連想してしまつた私は、古い?

江ノ電は、山と海と家々の間を縫うように藤沢に向かいます。児童文学は昔話のように、場所や時代を特定しないことも多いのです。しかし、佐藤多佳子の『黄色い目の魚』や、吉野万理子の『南西の風や強く』などは、湘南の海風を感じさせるYA小説です。

この地には、多くの文学者を虜にする多彩な魅力があるようです。藤沢駅近くのビル六階にある図書館は、利用者でにぎわっています。一隅には、藤沢に長く暮らした、「かこさとし」のコーナーが。

絵本『にんじんはたけのバババボ』では、こぶた達が、レンガで保育園と図書館と劇場を建てます。子どもを大切に思うかこらしめ結末です。時を経て、本のある空間は大切な場所であつてほしいと思えます。(林美千代)

児文協研究部 「連続トークイベント 子どもの本のひみつ」 今後の予定



第8回 愛知県

トークゲスト 村上しいこ × いとうみく 司会 林美千代

日時 2020年9月26日(土)

場所 名古屋某所

共催 日本児童文学者協会 研究部 / 中部児童文学会

●どなたでも参加できます! ぜひどうぞ。
詳細は、日本児童文学者協会 HP にて
<http://jibunkyo.main.jp/>

発行
日本児童文学者協会 研究部
2020年4月